

The World Times -9月号-

2-7 長谷川愛菜 1-7 豊田望海

今月号の world times では、SDGs 全体の理念として掲げられている 「誰一人取り残さない」 に注目しました。そこで、「多様性」をテーマにしたドキュメンタリー映画を視聴し、多様性について海外の中高生にインタビューを行い、意見を聞きました。

『バベルの学校』 原題 ; La Cour De Babel 監督 ; ジュリー・ベルトウチェリ 公開年 ; 2014 年

舞台はパリの中学校の適応クラス。(適応クラス : フランス語が話せない移民の子供のための、フランス語の指導を行いながら授業をする学校)

20の国籍の24人の生徒たち。彼らは様々な目的でフランスへやってきました。多様なバックグラウンドを持ち、母国語も文化も違う彼らが一つのクラスの中で1年間過ごし、彼らがクラスでの生活を通してどう変わってゆくのか描かれています。



《「バベルの学校」を視聴して》

フランスには年間3~4万人の移民の子供たちがやってくるため、彼らへのフランス語指導のために適応クラスを併設した学校が840校あります。この作品はパリのグランジェ・オ・ベール中学校の適応クラスの生徒の学校生活を、そのまま描いたものです。このクラスには、ネオナチの標的にされて逃げてきた生徒や祖国での児童婚から逃れるためにフランスにきた生徒など、「多様性」が制限されてしまうためにこれを求めてやってきた生徒が多くいます。このため適応クラスでは、様々な国の生徒を知るための活動や発言、発表を積極的に行っています。私は冒頭の、様々な国の「こんにちは」を発表する場面が印象的でした。「アッサラームアライクム」はアラビア語の「こんにちは」なのですが、このあいさつをムスリムではない生徒が自国で使っていると紹介したため、エジプト出身の生徒がそれはおかしいと反論したのです。多様性のある社会ではいつでもこのような意見の違いが生じます。そして、より注目すべきなのは彼らの解決方法です。このクラスの先生は大抵このような時にあえて口出しをしません。生徒が自ら解決方法を探し出すのです。私は適応クラスで受け継がれている良い文化は、多くの人が自分の意見をはっきりと述べていることだと思います。適応クラスでは、多様性のある社会を作り上げていくうえで、少数派の人が取り残されないようにするために必要な「主張する力」が養われているのです。

《インタビュー》

今回は海外の中高生4人に協力していただき、英語でメールのインタビューを行いました。

Q1. SDGsの「誰一人取り残さない」という目標を達成するために何ができると思いますか？

Q2. 多様性についてあなたはどのように思いますか？

Hannah/フィリピン/16 歳

A1. お互いに助け合い、他人に親切にすること

A2. 誰もが違いを持ち、誰もが多様性の一部であることは当たり前のことです。違うということは、誰もが特別であるということです。なぜなら人はそれぞれ違い、それぞれ信念と美しさを持っているからです。

Kimon/ギリシャ/17 歳

A1. 社会を通して、人々に平等な機会と支援を提供することを目標とするべきです。友情に関しては、お互いに偏見を持たずに公平であることが必要であると思います。特に民族的背景などの理由で誰も取り残されてはいけなないと思います。

A2. 多様性は人間関係においてとても大切だと思います。なぜなら、人々は異なる文化や視点を取り入れることでお互い成長できるからです。それはそれぞれの人がほかの人の間で自分のアイデンティティーを形成し、他の人や文化を受け入れることに役立ちます。

Katana/アメリカ/17 歳

A1. 常に他人に親切にし、必要な時に人を助けたり、時には自分ではなく他人のニーズを優先させることが大切だと思います。

A2. 多様性は人々に多くのことを教えることができる素晴らしいものだと思います。様々なバックグラウンドの人が周りにいることはよいことです。なぜなら世界の違いについて学ぶことができ、新たな考えに出会うことができるからです。

すべての文化には違いがあり、多様性に触れればその違いを知ることができます。多様性に触れなければ得られなかった知識を得られます。個人的には、私が触れてきた多様性のおかげで新しい技術とアイデアをたくさん学んでいます。

Ayesha/イギリス/16 歳

A1. 異なるバックグラウンドの人に囲まれ、そのような人たちと交流することでお互いを本当に理解し認め合うことが大切だと思います。例えば私の学校では culture day があり、みんながそれぞれの文化の服装をします。様々な国の出店や発表があり、多くのことを学べます。

A2. 多様性は美しいものです。危険な偏見や人種差別を無くして他の文化の慣習に心開くことができます。多くの場合、お互いに対する無知と、固定概念によって分離された文化が争いを生みます。

私は、多様な環境は新たな国に出くわして学び、新しい世界を開くという意味での教育環境だと思います。多様性は世界平和のために必要不可欠だと思います。私たちが同じ地球に住むためにはお互いを理解しなければいけないと思います。

《編集後記》

インタビューした質問について私たちも考えてみました。

豊田

A1. 取り残されそうな人がいるということを忘れないこと。取り残されていることにも気づいてもらえない人こそが本当に取り残されている人だと思います。

A2. 私の考える多様性とは、すべての人々が他人に影響を与えない範囲内で完全に自由な意思を持って行動できることだと思います。多様性を認めるということは相手の意思を尊重することです。

長谷川

A1. 取り残されそうな人がいることを広め、知ることだと思います。どんな人が取り残されてしまうのかを知ることが大切だと思います。

A2. 自分との違いを受け入れることだと思います。誰もが人と違い、その良さを受け入れて尊重することが私たちに必要なことだと思います。

今回の The World times の制作を通して、海外の中高生が多様性についてどのような意見を持っているか知ることができてとても面白かったです。今回私たちが視聴した映画は CINEMO で見ることができます。「バベルの学校」のほかにも様々なドキュメンタリーや映画を見ることができます。

以下の QR コードを読み取っていただくと、インタビューの全文（英語）を読むことができます。

